# シリーズ　私の一冊の本

**薬学部　　左一八　先生**

**ロバート･A .ワインバーグ著　野田 亮、野田洋子訳**

**『がん研究レース　ー発がんの謎を解くー』**

**閲覧室 2 階　491.65/ W 55　　岩波書店　出版**

本書の著者は、マサチューセッツ工科大学（MIT）卒業後、研究員としてイスラエル・ヴァイツマン研究所、米国カリフォルニア州・ソーク研究所を経てホワイトヘッド生物医学研究所およびMIT教授を歴任した、第一線の分子生物学者である。1982 年に実験的に細胞のがん化（正確にはトランスフォーメーション）を起こすことに世界で初めて成功し、ヒトがん遺伝子を同定するという発がん研究の中心となる業績をあげている。本書では、著者が単に分子生物学黄金期のがん研究の歴史を記述するにとどまらず（これだけでも読む価値はある）、その研究の中心で活躍した著者自身の個人的な回想場面が多く語られており、科学者としての成長の過程を描いている。まさに「事実は小説よりも奇なり」を地で行く物語である。著者がまだMITの研究員だった頃の以下のようなくだりがある。「私の憂うつは深まった。明らかに私の所属する研究部門は、私が最近やり始め､まだ成果を得ていない実験とよく似たことをやらせるために人を雇うとしている｡それは私にとっては､はっきりとしたメッセージであり、…（中略）…それをやってのけられる人物を見出した人々からの手ひどい仕打ちだった。」少し続いて以下のようなくだり、「私の研究経歴における一つの区切りが、はっきりと視界に入ってきた。」。研究員として実績を積み上げていこうとしている時に起きた実際の出来事を回想した記述である。優れた科学者は最初から優れていたのではなく、信じ続けて（これがとても難しいのだが）いくつもの挫折を乗り越えて初めてそうなることを改めて気づかせてくれる。研究分野に関わらず、これから研究者を目指そうとする人（いや、研究者でなくともこれから社会に出る人たち）に是非一読してほしい。なお、最近日本でも新聞などを賑わしている科学データのねつ造をした人物も登場する｡実は著者を上述のような気持にさせるまでに追い込んだ人物である。そこから形勢逆転、新しい着想で研究に取り組み、そして…。ここから先は実際に読んでください。